

# 環境ぱれっと

平成24年3月

第20号



パレットの上では、一つ一つの色が混ざり合って、新しい色が生まれます。

環境道民会議も、様々なカラーを持つ団体が連携し、環境保全活動を広げていくという思いを込め、この活動情報誌を「環境ぱれっと」と名付けました。

## 『環境道民会議ウィンターミーティング』を開催しました

平成24年1月17日に、かでの2・7において「冬の省エネ」についての先進的な取組などを紹介するとともに、道民や事業者としてどのように取り組んでいけば良いのかについて、参加者の皆さんとともに考える『環境道民会議ウィンターミーティング』を開催しました。

事例発表では、プロジェクトデザインセンターの岡田氏による薪を使ってCO<sub>2</sub>を削減する取組や、(株)東洋実業の辻氏による企業の省エネ対策、環境カウンセラーのビアンカ・フルスト氏によるドイツの省エネ型ライフスタイルについての事例が発表されました。

また、パネルディスカッションでは、コーディネーターに環境NGO ezorockの草野氏を迎え、『冬の省エネにどのように取り組むべきか』をテーマに様々な意見の交換が行われました。



今回も大勢の皆様にご参加いただきました

## 事例発表1

### 『薪を使ってCO<sub>2</sub>削減～どさんこ薪ネットについて～』

一般社団法人プロジェクトデザインセンター プロジェクトマネージャー 岡田 基 氏

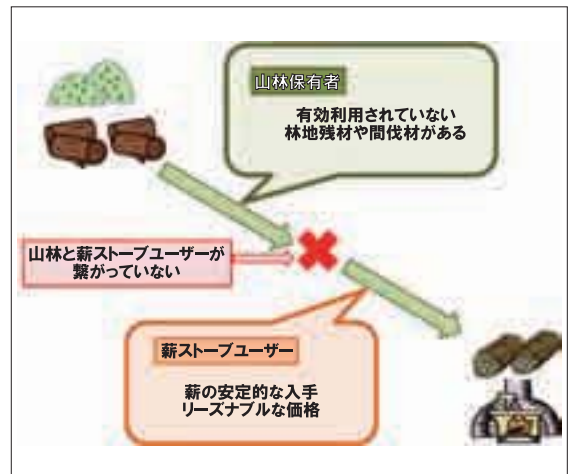
どさんこ薪ネット事業は、エネルギーの問題や地球温暖化問題への対策の一環として、林地残材や間伐材を有効利用したい山林保有者と、薪を安定的にリーズナブルな価格で入手したい都市部の薪ストーブユーザーとを繋ぐことで、木質資源を有効に活用する仕組みを作るための取組で、(財)北海道環境財団、北海道グリーンファンド、(社)プロジェクトデザインセンター、環境NGO ezorockの4者協働により実施しています。

このプロジェクトでは、モニター（参加者）による薪の持ち帰り方法の実験や薪利用によるCO<sub>2</sub>削減量の算定、薪ストーブユーザーのニーズ把握、事務局が担う作業量の算定などを行い、薪を有効利用するために必要な仕組みについて検討を行いました。

まず、モニターによる薪の持ち帰り方法の実験では、モニターに薪割りや保管、乾燥、運搬などに協力していただき、どのような作業をどの程度まで負担していただけるか等についての実験を行いました。次に、山林から都市部へ木材を運搬する際のCO<sub>2</sub>排出量や、薪の実際の使用量を明確化することで、薪利用によりどの程度のCO<sub>2</sub>排出量が削減されるかの調査を行ったほか、モニターへのアンケート調査から、多くの薪ユーザーが安定的でリーズナブルに薪を入手する方法について悩んでいることが分かりました。

そのほか、プロジェクトを運営する中で、拠点となる広い薪の供給場所の確保や、薪の種類はどのようなものが良いのか、提供方法はどうすべきかなどを検討し、プロジェクトの運営に係る事務局の作業量を算定しました。

今後の課題としては、既存の木材提供者との関係の強化や、提供者の多様化を図るほか、木材の保管場所の確保や、運営スタッフの育成が重要となってくると考えております。これらの課題を解決し、このプロジェクトの認知が広がっていくことで、今まで薪ストーブについての情報が不足していたため使用をためらっていた市民の方たちにも普及が進み、今後考えられるクリーンエネルギーへの転換の足がかりとしての役割を担う可能性が大いにあるのではないかと考えております。



## 事例発表2

### 『すぐに始められる企業の省エネ対策とは』

株式会社東洋実業 設備事業本部 参事 辻 晋治 氏

省エネ対策に順番があるというのをご存じですか。この順番を間違えると損をしてしまいます。逆に、順番を間違えなければ得をすることができます。

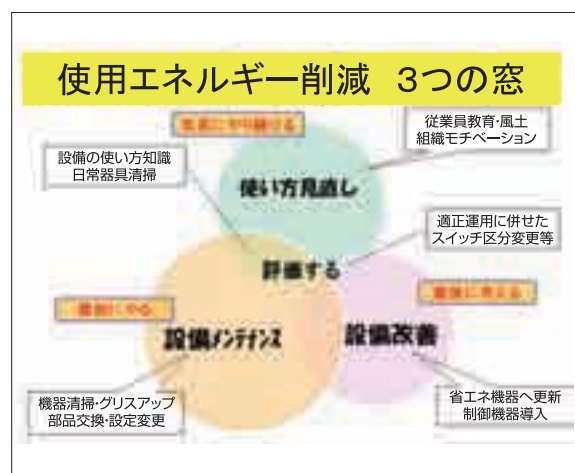
究極の省エネは何も使わないことですが、だからといってエネルギーを使わずに我慢するということはありません。最小のエネルギーで最適な環境をつくり上げること、普段の生活に必要なエネルギーを削ることなく、無駄に捨てているエネルギーを削減することがポイントになります。

そこで、まず始めに行っていただきたいのはご自身の行動様式の見直しです。特に、北海道では

冬期の室温を高く設定し過ぎていることがよくありますが、室内が乾燥してしまい体にも悪いです。是非とも、皆さんが帰られたらご家庭や職場でエネルギーの無駄がないかを見直してください。そうすると、人知れず動いているものがあったり、誰もいない部屋の電気が付けっぱなしになっていたりというようなことがあるかと思えます。これを見直すだけでもかなり無駄なエネルギーを削減することができます。

次に、設備のメンテナンスを適切に行ってください。暖房や冷房の調子が悪くなり、もう古いから交換しなければならないと思うような機械だったとしても、分解してフィルターや熱交換器を薬剤に浸して掃除しただけで熱交換効率が改善し、使用エネルギー量が大幅に減り、設備も更新せずに済んだという事例がいくつもあります。さらに断熱対策を施せば、空調に必要なエネルギーも減り、設備更新をされる場合でも、必要最小限の能力を持った効率の良い機器で済みます。そうすることで、少ない投資で大きな省エネ効果が得られるということになるのです。大事なことは、まずはご自身のエネルギーの使い方を見直して、設備の更新を行う前にメンテナンスを適切に行うことなのです。

最後になりましたが、省エネ対策は決して誰か他の人にしてもらうことではなく、設備の入替えだけで済むことでもありません。あなた自身がしなければならないことなのだとすることを忘れないでいただきたいと思えます。



## 事例発表3

### 『ドイツの省エネ型ライフスタイルに学ぶ』

環境カウンセラー ビアンカ・フルスト 氏

ドイツ人はみんなとても環境保全の意識が高く、こまめに省エネに取り組んでいるに違いないと思われる方も多いのではないかと思います。実際のところドイツ人の多くは環境に配慮した特別なことなんて何もしていないと考えています。

それでは一体ドイツと日本では何が違うのかというと、ドイツでは環境を守るためのルールがしっかりと決められているので、一人一人がそれほどこまめに省エネについて考えなくても、環境に配慮したライフスタイルになっているということなのです。

我慢してもどうせ長く続かない、初めのうちは熱心にやっても、そのうち大変だからやめてしまうというのがドイツ人の気質です。でも、それは日本人や世界の他の地域の人たちも同じことなのだろうと思います。賢い行動を定着させるためには、賢い仕組みを作るしかないのです。

そこでドイツでは、エネルギーの賢い利用のために省エネ条例を制定し、ボイラーなどの暖房施設は使用開始から20年以上経過した場合には更新しなければならないこと、暖房施設をつなぐパイプなどの断熱をしっかりとしていないと設備の稼働を中止しなければならないことなどの義務を定めています。

しかし、ルールを守るということも大切ですが、そのルールを守るために必要な情報やお金も十分に提供されているということも非常に重要です。札幌市の姉妹都市であるミュンヘン市では、市の建設センターに省エネの最新技術についての相談窓口があり、断熱材などに関する補助金の情報提供や、環境にやさしい建築材などについて専門家によるアドバイスを受けることができるほか、





省エネ対策のルールづくりの際に、もっともっとドイツのことを参考にすればらしいルールをつくって欲しいと思っています。

エネルギーアドバイザー制度というものもあり、専門家からあなたの建物はここで熱エネルギーをロスしています、こういった建築材を使って改修すると補助金が出ますというようなアドバイスを受けることができます。

最後に、ルールをつくることができるのは国や自治体だけではありません。自治体のルールが変わるのをただ待つのではなく、サークルや会社など、それぞれ皆さんが関わっている組織でも同じようにつくっていくことができると思います。

## パネルディスカッション

『冬の省エネにどのように取り組むべきか』というテーマで、環境NGO ezorock代表理事の草野竹史氏をコーディネーターに迎え、事例発表者をパネリストとして様々な意見の交換を行いました。

草野氏からの、企業が省エネの取組を継続するために重要なことは何かという問いに対し、辻氏は「私は前職で北海道から沖縄まで全国各地の約300店舗の設備とエネルギーの管理を行っていた際、毎年、年間数億円の光熱水費を削減しました。通常、我慢する節電だけだと2~3年で元に戻ってしまうのですが、きちんと対策をルール化したことで、その後も削減量を増やし続けることができました。また、省エネ効果を継続するためには、社風としてそういう文化を持っていることも大切です」との発言がありました。

みんなの納得するルールづくりを行う際に何が大切かという問いに対してビアンカ氏は「ドイツでも、以前は環境派とか企業派とか、みんなそれぞれの意見を主張してお互いの考え方を否定しているばかりだったのですが、現在はそれぞれの専門知識を生かして組織を超えたネットワークの中でルールづくりを行っています。大きな課題についても、小さな成功事例を積み重ねていくことが大切で、そのためには市民団体と先進スピリッツのある行政の方とがうまく連携することがとても重要になってきます」と発言されました。

また、市民を巻き込んだ仕組みづくりの工夫について、岡田氏は「普段、市民参加の重要性に気付くことがないまま生活をされている方に、「どさんこ薪ネット」が学びの場や気づきのきっかけを与えるような場として活用されることで、少しずつ市民の皆様の意識を変えていくようなことができれば良いのではないかと考えています」と発言されました。

最後に、草野氏が「今日、対立から対話の構造に変わってきており、誰それが悪いと責任を押しつけているだけでは社会は変わりません。所属を超えて一緒に議論することで、良い成果、仕組みをつくっていかねばならないということを、僕たちは学ばなければいけない時期にきているのだと思っています。省エネの取組についても、いろいろな垣根を越えた、今回のような議論の場が非常に重要になってきておりますので、皆さんともっともっと深い議論をして、より良い仕組みをつくっていったら良いのではないかと考えています」と発言されました。



パネルディスカッションの様子